

# 八尾南遺跡出土鏡片一般公開資料

財団法人  
八尾市文化財調査研究会

## 《調査の概要》

八尾南遺跡では、昭和53年から数次にわたって埋蔵文化財の発掘調査を行ってきました。今回の調査は、大阪府住宅供給公社の分譲住宅建設に伴う調査です。調査面積はおおよそ2500㎡になります。これまでの調査で主に弥生時代後期・古墳時代の遺構と、縄文時代から近代に至る遺物が検出されました。

## 《出土した鏡片について》

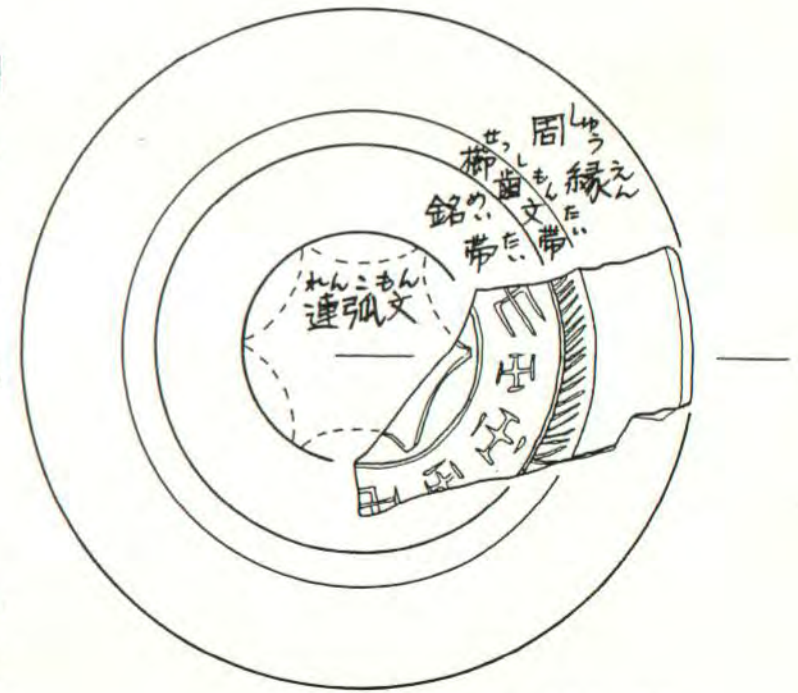
出土状況：弥生時代後期の包含層(遺物を含む地層)から出土しました。住居や井戸・墳墓などの遺構から出土したものではありません。また、この破片だけが出土しました。 名称：連弧文銘帯鏡(れんこもんめいたいきょう) 復元直径：8.4cm 厚さ：1.7mm～3.0mm

この鏡は、中国の前漢時代(紀元前3世紀～紀元後1世紀、日本では弥生時代中期)の鏡の型式を備えています。鏡の周縁には、懸垂用の穿孔(鏡をひもでつり下げるための穴)をあけようとした跡があり、また鏡のまわりは、割れ口の角を削ってあります。この鏡は、出土した破片だけでも祭祀用具(お祭りなどの時に使うもの)や、装身具(ペンダントのようなもの)として使われようとしたものと考えられます。古代の人々は、鏡を姿を見るためだけには使いませんでした。ですから、今でも鏡をカミ様としておまつりしている神社があります。

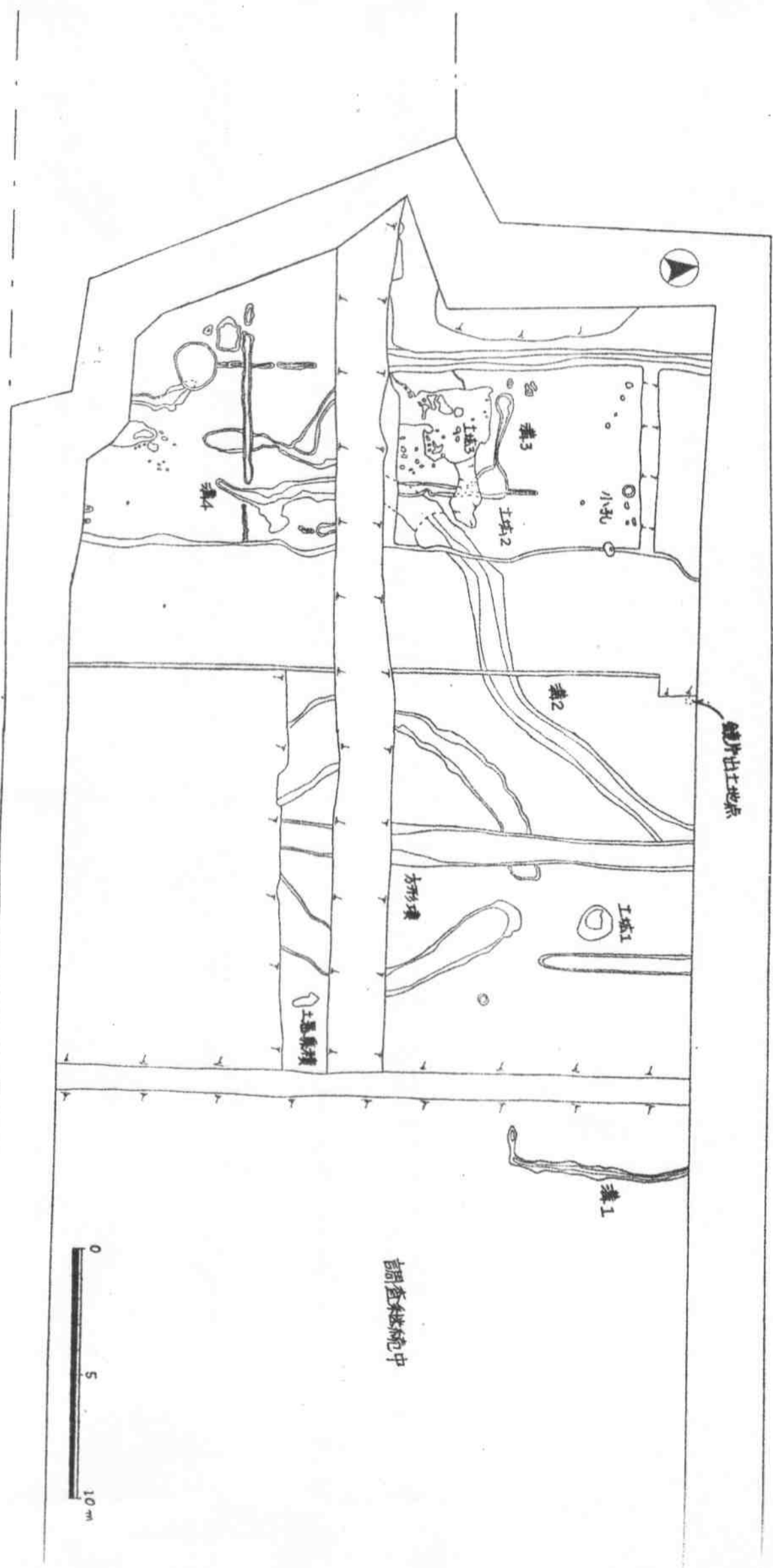
《連弧文銘帯鏡実測図 実寸》

鏡の型式は、先にも述べたように、中国の前漢時代の型式ですが、日本で作られたのか、中国や朝鮮で作られたのか、また日本で採れる原料で作ったのか、中国や朝鮮の人が作ったのか、今のところよくわかっていません。鏡の原料については、化学的な分析をすれば、日本のものか中国・朝鮮のものかは推定できると思います。いずれにしても、弥生時代の人々にとって、鏡はだれもが持っているというものではありません。かなりの権力をもっていた人が持っていたものと考えられます。ですから、鏡が出土した遺跡や、そのまわりの地域の遺跡の文化を考えるための貴重な資料であるといえます。

なお、今回出土した鏡と同じ型の鏡は、全国でも出土例がありません。ただ、よく似た型の鏡は、八尾市の亀井遺跡と中国の河南省洛陽で出土しています。また、中国の前漢からもたらされたといわれている鏡は、大阪府下では柏原市大泉遺跡出土の多紐細文鏡と、大阪市瓜破北遺跡の鏡片(連弧文







《検出遺構一覽表》

検出遺構	出土遺物	遺構の推定年代
土坑 1	な	不
土坑 2	弥生土器(小片)	弥生時代後期
土坑 3	弥生土器(壺・甕)、須臾器	不
溝 1	弥生土器(小片)	弥生時代後期
溝 2	な	弥生時代中期?

検出遺構	出土遺物	遺構の推定年代
溝 3	土器の小片	弥生時代後期
溝 4	弥生土器(壺)	
方形墳(12x8m)	須臾器(甗)、土師器(小片)	古墳時代中期
土器集積	弥生土器(壺・甕)	弥生時代後期
小孔	土器の小片	